様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月１３日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９４０１０２７
研究課題名（和文）　ラオス地方文書とオーラル・ヒストリーの組織的収集・保存体制の構築
研究課題名（英文）　The Collection and Conservation of Local Documents and Oral History in Lao PDR

研究代表者
増原　善之　（MASUHARA YOSHIYUKI）
京都大学・地域研究統合情報センター・研究員
研究者番号：９０３７８８２８

研究分野：人文学Ａ
科研費の分科・細目：東洋史
キーワード：東洋史、ラオス、地方文書、オーラル・ヒストリー、ランサン王国

１．研究計画の概要

本研究の目的は、これまでほとんど研究の対象になってこなかったラオス・ランサン王国期の地方文書（じかたもんじょ）および地方行政に関連した物品（印章、文書筒等）を探索・収集するとともに、古老らが語る村の歴史、土地の伝承、昔話等を採録し、それらをデジタル化資料として保存することで、内外の研究者のみならずラオス国民の利用に供し、ラオス前近代史研究の新たな展開に寄与することにある。現地調査は、年２～３回程度、北部のフアパン県もしくは南部のサワンナケート県において実施している。

本研究は、ラオスにおいてランサン王国期の地方文書を本格的に調査する初めてのプロジェクトであり、年代記を始めとする編纂史料に依拠した旧来の歴史研究から同時代史料を活用した新しい歴史研究への転換を企図している。さらに、ラオス国立大学の教員や学生および県情報文化局職員らに協力者として参加してもらうとともに、村人たちにも単なるインフォーマント（情報提供者）としてではなく、自分たちの村の歴史を掘り起こす調査者として活動に加わってもらうことで、ラオス地方史研究に対するラオス人自身の関心を呼び起こし、全国的な地方文書およびオーラル・ヒストリー収集プロジェクト立ち上げに向けて機運を高めていくことを目指している。

２．研究の進捗状況

（1）2007 年度

研究開始にあたり、カウンターパートであるラオス国立大学社会科学部と本研究実施にかかる具体的な協議を行い、2007 年８月、同学部内にプロジェクト・オフィスを開設するとともに、研究代表者および同学部教員等４名の計５名からなる研究調査班を組織することに合意した。その後、サワンナケート県において２回にわたって現地調査を行い、オーラル・ヒストリーの採録および地方文書の探索を行った。ピン郡ではフランス植民地化直前の 1892 年、同郡の領主が臣下の功労を称え、新たな氏名を与えることを記した文書を発見し、現代ラオ文字への翻字を行った。あわせて同文書を保管するための青銅製文書筒（ラオ語で「バンチュム」と呼ばれる）の写真撮影を行った。

（2）2008 年度

前年度に引き続き、サワンナケート県で１回、フアパン県で２回、現地調査を実施した。サワンナケート県では、かつてセポーン郡の領主が使用したと伝えられる３個の印章を発見することができた。インドシナ戦争当時、行政文書や印章を始めとする地方行政に関わる物品がほとんど失われたラオスにおいて、こうした印章が発見されることは極めて珍しい。

（3）2009 年度

前年度に引き続き、サワンナケート県で２回、フアパン県で１回、現地調査を実施した。サワンナケート県では、セポーン郡およびアサポーン郡においてバンチュム（文書筒）をそれぞれ１本ずつ、セポーン郡では想像上の動物と思われる図柄が入った印章２個と漢字６文字からなる印章１個、アサポーン郡ではハヌマーン（サル）の図柄が入った印章１個を発見した。特に、漢字６文字からなる印章の背部には 14 文字の漢字が刻まれており、この記事から同印章がベトナム阮朝第２代

皇帝明命（ミンマン帝）の在位８年目、つまり 1827 年に阮朝から現ラオス・サワンナケート地方の領主に下賜されたとする推測が可能であり、当時のラオスの地方領主が、シャムのバンコク王朝だけではなく、ベトナムの阮朝にも服属していたことを示す極めて重要な物的証拠であると考えられる。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

当初の計画通り、初年度は２回、第２年度および第３年度は、それぞれ３回ずつ現地調査を行うことができた。村の歴史、土地の伝承、昔話等の採録も順調に進み、現在、ラオス国立大学社会科学部の協力を得てテープ起こしを行っている。ただ、インドシナ戦争や社会主義革命(1975 年)前後の混乱により、ランサン王国期の地方文書がことごとく焼失あるいは破棄されてしまったため、これらを発見するのは極めて困難な状況にある。しかし、現地で広く情報を集めることによって印章あるいは文書筒といった地方行政に関する物品を発見する場合もあるので、今後も粘り強く探索を進めていきたい。

４．今後の研究の推進方策

2010 年度、本研究は最終年度を迎えることから、これまでと同様、フアパン県で１回、サワンナケート県で１回、現地調査を行うほか、2010 年 11 月中旬にラオス国立大学においてワークショップを開催する予定である。現地調査では、これまで調査を行った村を対象として補足的なデータ収集が中心となろう。ワークショップにおいては、研究代表者のみならず、これまで現地調査に同行してくれたラオス国立大学社会科学部の教員にも各々の研究テーマに沿って発表してもらう予定である。ワークショップには、同社会科学部はもとより、他学部の教員および学生にも参加を呼び掛け、開かれた意見交換の場にしたいと考えている。さらに、ワークショップの発表原稿をまとめたプロシーディングズを刊行するとともに、これまでの現地調査で収集した文書、地方行政に関連した物品、調査村の基本データ、オーラル・ヒストリーおよび写真等をデジタル化して、CD-ROM を作成し、ラオス国立大学、ラオス情報文化省、調査対象となった県の情報文化局および郡の情報文化課に配布したい。また、タイ国立図書館所蔵ラオス･ランサン王国行政文書の現代ラオス文字への翻字を行い、解題を付して 2010 年度中に刊行する予定である。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 増原善之、「ラオス・ランサン王国行政文書からみた地方統治制度について－地方国ムアン・ソーイ（現フアパン県ビエンサイ郡）の事例から－」、平松幸三編『研究報告書（CD 版）平成 17－20 年度科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号 17201048「ヤンゴン－ハノイ」トランセクトにおける生態環境の履歴（代表者：平松幸三)』、査読無、2009 年。

〔学会発表〕（計１件）

① 増原善之、「村に眠る古文書、異国に眠る古文書－タイ国立図書館所蔵ランサン王国行政文書の紹介を兼ねて－」、東南アジア学会関西地区例会、2009 年７月 11 日、京都大学。

〔図書〕（計２件）

① 増原善之、慶友社、「霧が晴れた朝－フアパン県古文書調査の一コマから－」、新谷忠彦他編『タイ文化圏の中のラオス：物質文化・言語・民族』、2009 年、125-9 頁。

② 増原善之、めこん、「人魚伝説とゴールドラッシュ」 横山智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』、2008 年、121-30 頁。